

## 植民地下朝鮮における龍谷高等女学校

太田孝子

### はじめに

高等女学校研究会（以下、高女研と略記）では、ここ10数年間、女子中等教育の実態の究明を目的に、日本国内の県立高等女学校（以下、高女と略記）、私立高女、および外地と呼ばれた地域のうち、朝鮮、台湾、関東州、満州、樺太、中国大陸、南洋群島の高女卒業生に対してアンケート調査を行ってきた<sup>1</sup>が、近年はその対象を台湾および朝鮮に絞って調査研究を続けている。その調査対象の一つが、本稿で報告する「龍谷高等女学校」である。

龍谷高女は、1926年5月1日、西本願寺によって京城に設立され、1945年の敗戦に伴い廃校となった高女であり、朝鮮においては日本人によって設立された唯一の4年制私立高女である。高女研では、1994年に至って初めて龍谷高女の朝鮮人卒業生を対象にアンケート調査を実施した。返送されてきたアンケートはわずか6通であり、内容的にも十分とはいえない回答が多かった反面、注目すべき回答も混じっていた。そこには、授業や学校行事に対する批判的な意見、裁縫の時間に和服に替えて朝鮮服を習うよう校長に直訴したこと、日本人にヨボと呼ばれ軽蔑されたこと、民族意識を育てようとした日本人教師との交流などが記されていた。その卒業生の記述にひかれて、我々は2回にわたり、現地でのインタビュー調査を実施した。卒業生の語る人生は起伏に富み、波瀾万丈そのものであったが、その人生がつむぎ出されてくる背景には、朝鮮という国の運命や両班という出自の中で培われてきた感性とともに、高女時代の恩師や友人との出会い、出来事などが大きく影響していることが窺えた。そして、今なお朝鮮人卒業生の中で大きな位置を占めている龍谷高女に我々も次第に関心を持つようになり、日本人卒業生に対する調査の必要を覚えるようになった。

日本植民地下の朝鮮で行われた高女教育の実態を調査することは、卒業生が高齢化する中、困難な作業であった。関係者が既に亡くなっていたり、資料の紛失も多く、「せめてもう数年早かったら」という卒業生の声を何度も聞いた。また、たとえ調査が行われ得たとしても、高女時代に関するアンケートや聞き取り調査は、過去の出来事や体験を述べるという形を取りながらも、各自の中に深く記憶された事柄や、日常を生きる中で捉え直されたものを述べるという面が多く、必ずしも本人によって「体験された生」そのものが語られ、記述されるわけではない。しかし、語られ、記述された内容は、龍谷高女の卒業生の中に、女学校時代がどういう形で記憶されてきたのか、特に、日本人卒業生にとっては朝鮮での生活が、朝鮮人卒業生にとっては植民地時代がどのような形で生き続け、今どういう形で存在しているのかを示すものと解することができる。植民地下に高女生として生きた人々の記憶に残る出来事を記録するという地道な作業も、当時の教育の内実を問い、植民地の意味をある角度から吟味するものとして意味を持つといえよう。西本願寺はどのような意図で植民地下に高女を作ろうとしたのか、仏教系私立高女としての特色はどのようなものだったのか、また、朝鮮人卒業生が持っていた批判意識を、日本

人卒業生は果たして知っていたのかどうか、日本人卒業生はどのような意識で高女時代を過ごしていたのかなどの疑問が調査を続けさせる力となった。

龍谷高女に関する資料はほとんど残存せず、卒業生各自にとっての貴重な資料も引き揚げや朝鮮動乱の中で多くが失われている。このように様々な限界を抱えたままではあるが、本稿では、これまで実施できなかった龍谷高女に焦点を当てて進めてきた調査・研究の報告を内容とする。特に、①仏教系私立高女としての特色を明らかにすること、②現時点で回想した場合、高女時代がどのような印象として記憶されているかを尋ね明らかにすることの2点に焦点をあて回答を分析した。なお、植民地時代を対象としているため、「朝鮮人」という当時の呼称を使用すること、および資料の多くは、旧漢字・旧仮名遣いを使用しているが、新漢字・新仮名遣いに直して記述することをあらかじめ断っておきたい。

### 1. 植民地下朝鮮の高等女学校と龍谷高等女学校

日本にとって、ハワイ「官約移民」開始（1885年）まで朝鮮は最多の渡航先であったが、そのほとんどが「商用、その他の諸用」を目的とした渡航であり、1876年の在留日本人はわずか54人を数えるに過ぎない。しかし、1900年に1万5829人、1907年に4万2460人を数え、1910年の日韓併合以後は、表1に示すように移住者が急増する。京城の町には「明治町」「長谷川町」「大島町」などの日本名が付けられ、日本語の看板が氾濫し、和服姿の日本人が闊歩していた。敗戦直前の1944年には71万2583人と、内

表1 日本人の朝鮮移住の推移

年	戸数	人口
1910	50,992	171,543
1914	83,460	291,217
1918	93,628	326,872
1922	106,991	386,493
1926	117,001	442,326
1930	126,312	501,867
1934	141,417	561,384
1939	161,400	650,104
1942	179,349	752,823

\*『朝鮮年鑑』京城日報社、昭和20年版より作成。

表2 職業別朝鮮在留日本人数（1910年12月末）

職 種	戸 数	人 口				計
		本 業		兼 業		
		男	女	男	女	
官 吏	7,752	8,214	5	4,297	10,415	22,931
公 吏	972	1,228	0	671	1,477	3,376
教 員	672	676	93	353	783	1,905
新 聞 及 者	165	186	0	97	164	447
新 聞 記 者	20	25	0	11	28	64
神 侶 官 及 師	137	162	1	74	127	364
弁 護 士 及 訴 訟 代 理 人	77	79	0	49	117	245
医 師	388	397	4	354	671	1,426
産 婆	99	0	171	77	75	323
農 業	2,210	2,518	261	2,024	3,009	7,812
商 業	14,568	15,877	1,084	10,549	21,292	48,802
工 業	5,619	6,520	137	3,329	7,808	17,794
漁 業	1,423	2,125	213	1,099	1,978	5,415
雑 業	10,368	12,336	1,517	7,556	14,134	35,543
芸 娼 妓 酌 婦	89	0	4,093	95	229	4,417
労 力	4,715	6,251	578	2,884	5,744	15,457
無 職	1,718	1,443	341	1,195	2,243	5,222
合 計	50,992	58,037	8,498	34,714	70,294	171,543

\*『朝鮮総督府統計年報』1910年度、pp. 82-87より作成。

\*「兼業」の大部分は家族と考えられる。

(木村健二『在朝日本人の社会史』未来社、1989年、p. 2より)

表3 本籍地別朝鮮在留日本人

1896年				1906年			
府	県	人数	比率	府	県	人数	比率
		人	%			人	%
長	崎	3,587	30.3	山	口	13,251	17.0
山	口	3,294	27.8	長	崎	8,542	11.0
大	分	970	8.2	福	岡	5,842	7.5
福	岡	646	5.4	大	分	5,436	7.0
熊	本	460	3.9	広	島	4,176	5.4
大	阪	427	3.6	熊	本	4,164	5.3
広	島	310	2.6	大	阪	3,772	4.8
佐	賀	257	2.2	佐	賀	2,540	3.3
兵	庫	233	2.0	兵	庫	2,252	2.9
東	京	229	1.9	東	京	2,121	2.7
その他 36道府県		1,441	12.2	その他 37道府県		25,816	33.1
計		11,854	100.1	計		77,912	100.0

\*1896年は『東邦協会会報』第38号、1897年、pp. 78-80。

1906年は『統監府第一次統計年報』1907年、pp. 16-20より作成。

(木村健二『在朝日本人の社会史』未来社、1989年、p. 14より)

地の小さな県に匹敵するくらいの日本人が在留していたのである<sup>2</sup>。併合前後の職業、出身地については表2、表3の示すとおりであり、職業としては商業を中心とした生業従事者が多く、九州を中心とする西日本の出身者が多数を占めた。この傾向は敗戦に至るまで続いている。

併合後、学校教育では在留日本人向けと朝鮮人向けの2つの教育体制が敷かれた。1911年の朝鮮教育令による朝鮮人向け教育体系は、①普通学校(3~4年)、②高等普通学校(4年)、③女子高等普通学校(3年)、④実業学校(2~3年)、⑤簡易実業学校(年限の規定なし)、⑥専門学校(3~4年)であるが、1915年の状況を見ると、朝鮮人普通学校は399校で生徒数は男子5万6253名、女子5976名(日本人小学校は291校で生徒数は男子3万1442名、女子2万8206名)、高等普通

学校は2校で生徒数822名(日本人中学校は2校で生徒数1034名)、女子高等普通学校は2校で生徒数250名(日本人高等女学校は7校で生徒数1191名)、商業学校は4校で630名、公私立農業・養蚕・農林簡易実業学校は8校で224名、工業簡易実業学校は7校で168名、水産簡易実業学校は1校で29名の就学者を数えるにすぎない<sup>3</sup>。1922年の改正教育令により、各教育年限が若干伸びたものの朝鮮人に対しては在留日本人向けより水準の低い簡易な教育が行なわれたのであった。さらに、1938年の教育令改正からは朝鮮語、朝鮮地理、朝鮮歴史の授業は随意科目からもなくなり、皇民化教育が押し進められていった。このような教育体制が朝鮮人の反発や抵抗を招いたことは周知の事実である。

本稿のテーマである女子中等教育について詳述すると、1906年に釜山居留民団により釜山高女、京城居留民団および婦人会により京城女学校(1908年から京城高等女学校と改称)が設立される。そして上述のように、1911年の朝鮮教育令により、日本人の教育機関とは別に朝鮮人向けの教育機関が組織され、日本人の女子は高等女学校、朝鮮人の女子は女子高等普通学校と別々に制度化された。内地の高女急増期である1911年から30年の間に朝鮮では31校が設立されている。しかし、1938年の教育令改正からは女子高等普通学校は組織上、高等女学校に一本化される。この措置により、朝鮮人の女学生が通学していた女子高等普通学校が廃止され、この時点で、高等普通学校を含む34校が新たに日本の学校体系の高女として認可されたのである。朝鮮における高等女学校の設立状況は表4に示したとおりであり、特に私立高女の増加が多く見られる。この表中、京城および近郊の女学校は、公立が京城第一、京城第二、京城第三(以上は、日本人を対象とした高女であり、若干の朝鮮人が在籍)、鶴舞(日本人朝鮮人がほぼ半々)、京畿(朝鮮人のみ)の5校であり、私立は龍谷(日本人を主に、朝鮮人も在籍)、淑明、進明、梨花、培花、同徳(以上は朝鮮人のみ)の6校である<sup>4</sup>。

表4 朝鮮における高等女学校設立状況

公私	高等女学校名	設立年	備 考	公私	高等女学校名	設立年	備 考	
公立 高等 女学 校	京城第一	1908	旧名京城高女	公立 高等 女学 校	海州幸町	1932	1935年に高女となる 1913年実科高女として設立  1922年実科高女として設立 1913年実科高女として設立	
	京城第二	1922			沙里院	1924		
	京城第三	1941			兼二浦	1937		
	仁川	1913			安岳	1940		
	開城	1884			平壤	1913		
	京畿	1908			平壤西門	1914		
	京城舞鶴	1940			鎮南浦	1917		
	水原	1941			順川	1943		
	清州第一	1923			旧名清州高女	新義州		1929
	清州第二	1938				新義州南		1936
	忠州	1942	定州			1943		
	大田	1921	春川			1934		
	大州	1928	江陵			1940		
	大東	1937	鐵原			1939		
	烏致院	1941	咸興			1924		
	江景	1943	元山			1921		
	群山	1921	興南			1934		
	全州	1924	咸南			1935		
	全北	1926	元山港		1942			
	裡里	1924	羅南		1920			
	金堤	1941	東羅南		1935			
	井邑	1943	清津		1926			
	木浦	1920	咸津		1938			
	光州大和	1923	旧名光州高女		會寧	1924		
	光州旭	1927			羅津	1939		
	麗水	1938			龍谷	1929		
	順天	1940			淑明	1906		
	大邱	1916			進明	1906		
	慶北	1926			梨花	1918		
	金泉	1935			培花	1898		
浦項	1939	同德		1911				
安東	1942	開城明德		1918				
釜山	1906	仁川昭和		1938				
鎮海	1923	東萊	1940					
馬山	1915	明新	1898					
釜山港	1927	南山	1920					
晋州	1939	咸興日出	1929					
統營	1943							
海州旭町	1923							

出典：高等女学校研究会編『高等女学校資料集成第17巻 外地統計年報編』大空社、1990年。

しかし、朝鮮では王朝時代、支配層における女子の教育は主に家庭が担っており、女性のための教育機関は存在しなかった。金富子の研究によると、女子に対する学校教育の開始は1876年の開港以降のことであり、以後、①1886年の梨花学堂の設置に始まる外国人宣教師によるキリスト教系私立学校の登場、②1895年9月「男女の就学」を定めた小学校令の発布、③愛国啓蒙運動期（1905～10年）における民間人による女子のための私立学校（初等教育機関）の設立、の3つのエポックが指摘されるという。しかし、第2期の小学校令は女兒就学を促す実質的措置を伴わず、第3期に設立した142の私立学校も、1908年の私立学校令により学校の設立基準、教員の採用、授業の内容等が厳しく統制されたため、順調な発展をとげることにはならなかった。表4に登場する私立高女（龍谷高女を除く）が厳しい統制をくぐり抜け存続してきた数少ない学校である。1908年に官立漢城高女（後の京畿高女）が開設されたものの、日韓併合前の時点で、朝鮮人女子で学校に就学した者は限られた一握りにすぎなかった。1930年時点でさえ朝鮮人女性の識字率は8.0%、普通学校への女兒就学率は5.7%という状況である<sup>5</sup>。金富子はこのような就学率の背景に、男性中心の封建的旧思想、生活難、上流階級による就学拒否などを指摘している。しかし、1930年代から女子教育に対する意識に変化がみられるようになり、その変化は朝鮮の旧教育の中心機関である書堂<sup>6</sup>への女子就学者数の増加という形で現われてくる。書堂への就学者が植民地末期まで一貫して増加しているのが、朝鮮における女子教育の特徴である<sup>7</sup>。

このような教育的状況の中で、龍谷高女が西本願寺によって設立されることになる。日本仏教界の朝鮮開教への動きは、1876年の釜山の開港により始まる。翌年8月、東本願寺は直ちに上釜山に別院を開き、やや遅れて日蓮宗、浄土宗、西本願寺が同地区で開教に着手する。さらに、日本人の移住が激増する日露戦争後を境として、日本仏教各宗の朝鮮開教熱は一層高まり、保護統治時代を経て日韓併合にいたる明治末には、東西本願寺を始め、各宗派がいずれも京城に布教監督所を置いて全鮮の主要地に進出していくのである。

大谷派本願寺朝鮮開教監督部編『朝鮮開教五十年誌』によると、1889年2月から山口太兵衛（龍谷高女1940年卒業生の祖父）は、在留日本人子女の教育の必要を覚え、児童教育を開始したが、適当な教師の確保が困難であったため、京城に布教所を設置して在勤者に布教の傍ら教育上の責任も課すことを考え、1890年7月、釜山別院京城支院を設置した。支院内に設置された教育所が、日之出尋常小学校の前身であり、当時は居留地唯一の宗教および教育機関として多大の尊敬と帰向を受けたといわれる<sup>8</sup>。

各派が主に幼児教育に注目する中、本願寺派は女子中等教育にも関心を示していく。その母胎となった京城別院は、上述のように、釜山別院京城支院として創設されたものであり、1895年2月7日に別院として改称・独立している<sup>9</sup>。同派による女学校設立の胎動は、1925年の「朝鮮人経営の実践女学校が、時節柄経営に困難せるを以て之を買収して京城本願寺別院の経営に移し、鮮人子女の教育に力を竭さんと先般来より交渉中なるが若し円満裡に協議纏らば、来年度より同別院の手にて経営することとなれり」<sup>10</sup>という記事に残されている。この記事以降どのような協議がなされたのか詳細は不明であるが、「京城本派本願寺別院に於ては予てその筋へ設立認可申請中の処、本月7日付けを以て龍谷女学校設立を認可せられ」<sup>11</sup>、1926年5月1日、京城桂洞36番地に開校した。仏教の「慈悲」と「良妻賢母」の道を校訓としている<sup>12</sup>。この時点ではあくまでも「龍谷女学校」であり、正式に「龍谷高等女学校」として認可されるのは1929年9月のことである。

龍谷高女の設立に関しては、眼前に経営難に陥った女学校が存在したことが大きく影響しているが、仏教布教の一手段、あるいは信者の子女の教育という目的もあったことが考えられる。日本は併合後、

諸宗教の布教活動を保護して朝鮮人信徒の増加政策をとっていくが、神道信徒数が伸び悩んでいるのに対し、朝鮮人の仏教信徒は1916年以降増加する（表5）。それは朝鮮人が天皇制と密着した神道よりも仏教を、そして仏教よりもキリスト教を選ぶ傾向にあったことに起因しているが<sup>13</sup>、龍谷高女の設立の背後には、仏教信徒を中心とする各方面からの強い要望があったことがうかがえる<sup>14</sup>。

開校の翌年（1927）には、「入学志願者210名で100名を入学せしめ朝鮮人4対日本人6の割合で、本年から制服を着ることとなり両者とも同一の服装であるということから親しみを深くしている」<sup>15</sup>という記事が見られる。しかし、表6に示したように、朝鮮人入学者の数は年々減少しており、「朝鮮人4対日本人6」の割合が守られることはなかった。卒業生からは、「鮮人子女の教育に力を竭さん」ということばは名目であり、「内鮮人半々ということを出して女学校設立の許可を得た」という証言も聞いた。加えて、高女教育を受けることができるだけの日本語能力の問題、多額の寄付金、既述のような朝鮮人の女子就学に対する意識と植民地下の教育への反発などが朝鮮人入学者数に影響を与えたようだ。日本語は普通学校で「国語」として教えられてきたものの、1943年現在、日本語を理解する朝鮮人の数は、やや理解しうる人も含めて、全人口の22.5%だったといわれている<sup>16</sup>。そのため、朝鮮人入学者は、名門あるいは裕福な家庭出身の日本語ができる生徒が主であり、寄付金を払ってまで、わざわざ日本人の経営する高女を選ぶ朝鮮人は極めて少なかったのである。また、予想以上の在留日本人女子の増加も、学校の初期の方針を変更させていったものと思われる。

表5 神道と仏教の布教状況（1907～18年）

年次	神 道				仏 教			
	布教所数	布教者数	在朝日本人信徒数	朝鮮人信徒数	布教所数	布教者数	在朝日本人信徒数	朝鮮人信徒数
1907	6	6	1,876	440	63	67	27,955	8,008
1908	10	18	2,327	306	83	102	29,939	13,208
1909	22	39	3,825	1,171	86	118	34,365	16,520
1910	28	26	7,823	3,086	113	95	34,257	27,392
1911	43	49	11,018	9,427	150	140	34,693	33,652
1912	51	70	7,989	5,312	117	189	58,342	24,645
1913	52	64	7,799	4,795	208	209	64,701	9,977
1914	62	74	9,403	4,051	212	224	69,010	7,832
1915	52	91	25,365	10,585	211	205	86,020	7,854
1916	65	103	27,801	8,558	209	282	104,169	80,744
1917	70	110	30,837	8,420	234	319	111,349	66,864
1918	78	119	38,717	8,482	259	355	116,743	97,207

出典：『最近朝鮮事情要覧』各年度版、『朝鮮総攬』、『三千里』（No. 15, p. 118）

\*布教所数には神社、寺院も含む

表6 龍谷高等女学校の学級数・教員数・学生数の変遷

項目 年度	学級数	教員数		教員数		教員数 計	在校生数		入学者数		卒業者数		退学者数		死亡者数	
		内地男性	内地女性	朝鮮男性	朝鮮女性		内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
1929	6	8	5	0	0	13	140	52	137	52	0	0	0	1	0	0
1930	5	5	4	0	1	10	162	57	62	10	34	10	36	4	1	0
1931	5	5	4	0	1	10	180	58	64	18	41	18	16	5	0	0
1932	5	6	4	0	1	11	206	51	96	18	29	23	17	8	5	1
1933	6	7	4	0	1	12	300	38	146	10	51	9	17	4	1	0
1934	7	11	5	0	1	17	388	27	152	3	49	13	28	4	2	0
1935	9	13	7	0	1	21	491	20	186	10	88	6	38	0	1	0
1936	10	15	6	0	1	22	571	18	202	3	102	4	30	2	0	0
1937	11	11	8	0	0	19	635	21	203	9	113	2	42	0	1	0
1938	12	13	10	0	0	23	689	22	215	4	162	7	42	2	1	0
1939	13	13	11	0	0	24	747	23	261	10	171	2	34	2	0	0
1940	14	12	9	0	0	21	793	32	257	12	163	7	43	2	3	0
1941	15	14	10	0	0	24	861	28	-	-	-	-	-	-	-	-
1942	16	12	12	1	1	26	925	32	-	-	-	-	-	-	-	-
1943	16	4	12	0	0	16	917	33	-	-	-	-	-	-	-	-

\* 高等女学校研究会編『高等女学校資料集成 第17巻 外地統計年報編』(大空社、1990)より作成。1929-40年の統計は『朝鮮統監府統計年報』による、1941-43年の統計は『朝鮮諸学校一覽』による。1941-43年の入学者以降の欄は資料がなく不明。

1927年6月20日に開催された西本願寺派朝鮮別院教育会総会では「龍谷高女学生父兄より可成別院境内に校舎移転の希望の誓願」が協議され、「父兄の希望を容れ別院文書伝道館に接続して校舎を新築する」ことが決定した<sup>17</sup>。新校舎は翌年1月完成し、朝鮮別院構内若草町107番地に移転している。さらに、入学志願者の増加に伴い移転拡張が計画され、1933年7月11日に新築起工式が行われた<sup>18</sup>。1934年5月7日、800余名の来賓を迎え、京畿道高陽郡漢芝面新堂里で新校舎の落成式が盛大に行われている<sup>19</sup>。続いて翌35年には、第二次工事が行われ、大講堂、音楽室、作法室、倉庫が増築され、36年度には博物、理科、家事、裁縫、手芸、器械、標本、準備室を含む煉瓦二階建ての特別室および洗濯場洗面浴場養護室等を含む木造の附属建物の増築が計画されている<sup>20</sup>。また、1935年には、京城府内の篤志家が奉安殿建設を、同校の同窓会である藤陰会が藤陰会館の建築寄付の申し込みをしている<sup>21</sup>。この新堂里の校舎は現存しており、1945年に同校が廃校となった後は、女子実業高校として使用されている。

## 2. 調査の概要

高女研では、1994年に初めて龍谷高女の朝鮮人卒業生を対象にアンケート調査を実施した。発送先に関しては中央日韓協会より同窓会の役員に関する情報を得て名簿を借用し、調査対象者をランダムに抽出する方法をとった。その後、アンケートの集計や史・資料による実態把握作業を続ける一方、直接韓国に向いて卒業生にインタビュー調査を実施した(1997年9月22日と1998年1月4日~7日の2回)他、和洋女子大学教授山本禮子、埼玉大学教授新井淑子により1997年12月25日に元教師戸石あや子へのインタビューが行なわれた。この過程で、朝鮮人卒業生との比較のために日本人卒業生に対する調査の必要を痛感し、同様のランダムな方法によりアンケート用紙を発送した。また、元教師5名にもアンケートを実施したが、2通回答があった。さらに同窓会役員と連絡を取り、資料の有無を確認した他、

同窓会を通して追加アンケート調査を依頼した。また、1999年12月4日には11名の日本人卒業生有志（1939年卒業生3名、1940年卒業生3名、1943年卒業生5名）との会合を持った他、必要に応じて電話による確認、聞き取り等を行った。上記の2回のインタビュー調査および会合は山本禮子と共に行っている。

アンケート調査期間は1994～99年の間、4回にわたって実施し、回収状況は以下の通りである。1994年の朝鮮人卒業生に対するアンケート調査では、30通のアンケートを発送し、6名から回答を得た（回収率20%）。1998～99年にかけて行った日本人卒業生に対するアンケート調査では、78通のアンケートを発送し20通の回答を得た（回収率25.6%）。発送先は同窓会に一任したものもあり、入学年次等の詳細が一部不明であるためここでは回収結果のみを記しておく。卒業年次別回答者数は、日本人20名（F-1名、G-7名、H-12名）、朝鮮人6名（E-2名、F-4名）、教師2名（41年2月～44年4月在職、43年1月～45年11月在職）である。上記区分は高女研が従来から用いてきた、E-1930年型（1927～1931年の間の卒業生）、F-1935年型（1932～1936年の間の卒業生）、G-1940年型（1937年～1941年の間の卒業生）、H-1945年型（1942年以降の卒業生）によった。

アンケートの内容は、従来から使用してきた内地の高女卒業生と外地卒業生のアンケート調査に準拠したが、仏教系私立学校であることや高女受験のための小学校時代の受験勉強の方法および引き揚げ前後の意識等を把握するために、記述式7項目を追加した（アンケート項目は付録として末尾に添付、追加項目には\*印を付した）。

本稿では、上記計26通のアンケート結果を記述する。また、インタビュー調査や教師へのアンケート、同窓会誌「ふじかげたより No.1」（同会による刊行はこの1号のみ）等によって得られた情報を適宜加えていくこととする。必要に応じて回答者の卒業年次を西暦で記入した。この調査結果は龍谷高女の26通のみの回答によるものであり、不十分な記述もみられるので、高女研が行ってきた従来の報告書のような表は作成しないこととした。回答数は少ないが、冒頭で述べたように、龍谷高女の教育実態を把握する際の貴重な資料となるものと考えている。

### 3. 龍谷高女生の生活環境と学校生活

#### 3-1. 父母の職業と家族構成

龍谷高女生の家庭の職業、すなわち父あるいはそれに代わる保護者（父が死亡したものは2名であり、兄が保護者となっている）の職業は左の通りである（表7）。

1943年の卒業生によると、龍谷高女の月謝は7円20銭で、公立の4円50銭よりかなり高額であり、朝鮮人に課せられる特別な寄付金もあったというが、父の職業を見てもその月謝を払える階層が多かったことが分かる。アンケートの中にも女学校時代の印象として「裕福な家庭の方が多く、とても大らかだった」（1943年卒、以下1900を省略）との記述が見られる。しかし、教師戸石あや子のインタビューからは、授業料の滞納者の名前が張り出されると、そのほとんどが朝鮮人学生であったようだが、何人かの教師が出しあって助けたといい、教師の中には朝鮮の生徒の面倒をみる傾向があったとの証言も得た。朝鮮人卒業生の1人はアンケートの記述において、父親が最下層の官吏であり、さらに父親の収入の半分を朝鮮の「三寸（三親等）の権利」によって伯父が持って行ってしまったため非常に貧しく、「菘先生が授業料を出して下さった。多分月謝が5円（引用者注—35年卒）で4ヵ月分、20円位だったと思います。修学旅行の時も汽車の中で5円だったか10円だったかお小遣いを下さった。びっくりするく



表7 家庭の職業

職業	内 訳	人数
自営業	和菓子製造販売(1)	6
	玩具問屋 (1)	
	業界新聞社経営(1)	
	商業 (2)	
	他 (1)	
公務員	教育関係 (1)	5
	農商工大臣 (1)	
	面書記 (1)	
	他 (2)	
他の職業	朝鮮総督府	4
	朝鮮銀行	3
	会社員	2
	朝鮮鉄道局	2
	機械技師	1
恩給生活		1

らい大きなお札でした。でもそれは使えません。全然使わないでお返しした」と答えており、経済的に苦しい中で学業を続けていた生徒もいたことが判明している。

具体的に記された母の職業は皆無であり、「主婦」または「無し」の回答のみであった。

家族構成については、23名が核家族（内2名が父死亡）、3名のみが大家族であり三世代の家族は極端に少なかった。日本人卒業生に限ってみるとわずか1名が祖父と同居しているだけであった。これは、外地移住者が二、三男であるため両親を伴う必要が無かったこと、外地に転勤で一時的に勤務する場合は高齢の親を同伴することが少なかったことが反映したものと思われる。ちなみに、今回の調査では、日本人卒業生20名の内、外地生まれが11名（内、京城生まれ8名）であり、長期にわたって外地に居住した家族が多かったことが窺えた。

一家庭の兄弟の人数は平均4.8人であり、前回調査<sup>22</sup>の日本人卒業生の平均値の4.5人よりやや上回る。日本人卒業生に限った平均値は5.0人と高く、7人兄弟が3人、8人兄弟が2人、10人兄弟が1人であった。1家族に対する使用人数の平均は1.2人であり、前回調査の1.9人を下回る。この数値は、上述

した父の職業が反映したものと思われる。使用人については、日本人卒業生では自営業の家庭に使用人がおり、この使用人は全て朝鮮人であった。朝鮮人卒業生では全員の家庭に使用人がおり、中には8人いたという回答もあった。

### 3-2. 入学準備状況

今回、1回目のインタビュー調査で小学校（普通学校）時代のことが話題となったのをきっかけに、3回目以降のアンケートに高女入学前の受験に関する質問項目を加えた。これは、全員に質問したものではないのだが、参考までに結果を記しておく。日本人卒業生のうち、小学校を外地で終えたものが20名中13名である。

受験勉強は国語、算数、修身を中心に全員が行っており「毎日暗くなるまで受験勉強をした。夏休みも冬休みも宿題がたくさん出た」（5名）、「テストが出来ないと居残り勉強をさせられた」などの厳しいものが目立った。「兄や姉に教えて貰った」（4名）、「算術が弱かったので家庭教師に指導された」という回答もあった。ほとんどの卒業生がこの受験指導を感謝をもって受け止めているが、朝鮮人卒業生の一人は、「12月頃から同級生4人と毎晩炭だけをもって先生の家へ受験勉強に通い、指導を受けたことが忘れられない」といい、その恩師成田清子を深く記憶している。

龍谷高女の試験科目については、国語（13名）、数学（11名）、理科（5名）、作文、体力検査（各4名）、口頭試問、地理（各3名）等多様な回答がみられたが、入学年によって分類できる回答ではなかった。この回答には公立の受験科目との混同もあるものと思われる。

### 3-3. 学校の状況と進学の意味

教員数、生徒数などは表6に示した通りであり、回答者はほぼ表に示した数字に近い人数を記憶していた。クラス名には、各学年とも、藤（西本願寺の紋が下がり藤であることによる）、桐、梅、竹が用いられたが、「朝鮮の人は藤組にまとめられていて、一度も一緒になったことがない」という年代もあったようだ（39年卒）。

進学の意味に関する質問では、「進学するのが当然」が20名で全体の76.9%（そのうち4名が親の奨め、3名が教師の奨め、2名が兄弟の奨めを併記）を占めているが、前回調査の外地の高女生の平均85.3%を下回った。「両親はお寺さんの学校だからと信じ切っており、私もお寺の雰囲気が好きで龍谷に行った」（39年卒）という積極的な入学者もみられたが、日本人卒業生の回答には「公立を失敗して」、「編入学で」、などの理由が目立ち、反対に朝鮮人卒業生は「日本の友達と勉強したくて自分で行きたいと思ったし、親も本人がしたいのを止められなかった」（32年卒）、「教師の薦めもあったが自分で行きたいと思った。それは当時の情勢と異文化に対する少女の憧憬からであった」（35年卒）など期待と憧れを持って入学していることがわかった。朝鮮人学生の中にも、父親の転勤により京城に移ったものの、京城第一、第二、京畿、進明、淑明の各高女のどこにも二年次生の欠員がなく、龍谷しか入るところがなかったという回答もあった。

### 3-4. 授業の内容

**修身・国語・地理** 修身の担当者については、修身の先生（10名）、校長（5名）、教頭（5名）、他（2名）という回答であり、専任の教師が置かれていたことがわかった。しかし、この教科に関する印象がほとんど記載されていないのが特徴であった。日本人卒業生の記述が「目上の人に対する言葉遣い、態度、物を大事にする、人としての常識」「公共のこと、世の中の仕組み、礼儀作法」「教育勅語の暗唱」と徳目あるいは教授内容のみの記述にとどまっているのに対し、朝鮮人卒業生は「人間としての持つべき理想を教えられた感じでした。私立で仏教系でしたので、皇国臣民ばかりでなかったのはよかった」（35年卒）と問題意識を持っていたことが窺える記述がみられた。授業形態としては「学年4クラス全員同時に講堂で受講」という形式がとられたようである。

国語の学習内容としては、作文（14名）、書き取り（13名）、漢文（11名）、読書（10名）、古文（9名）、漢字のけいこ（2名）が挙げられている。「京都女子大出身の素晴らしい先生」「朗読が好きでよく読まされた」「作文、文法などが好きで本は乱読だった」などの印象が示すように、自分の得意な分野や好きな先生の思い出と結びついた記述が目立った。

歴史・地理については、暗記（13名）、地図作成（8名）、見学（3名）、史跡調査（2名）であり、他に「先生の時局に対する解説」（40年卒）「龍谷大学出身の先生の卒論を勉強した」（32年卒）というユニークな回答が各1名あった。歴史は「先生の教え方が上手で面白くとても楽しかった」（42、43年卒計3名）が、各々「年代を覚えるのに苦労」したようだ。一方、朝鮮人卒業生の回答には「今考えてみれば全く不適當でした。日本歴史で天皇の名前ばかり覚えて何になりますか」という鋭い批判が記されてあった。日本人卒業生の記述にも「歴代の天皇の暗記」という印象が記された回答があったが、それは単に授業の内容を回顧した記述であり、朝鮮人の級友がどのような気持ちでその授業に臨んでいたのかということまで思いやりの回答とは読めなかった。別の朝鮮人卒業生も「韓国の歴史と教育が必

要でした」という控えめな表現ながら、自国の歴史を学ぶ機会を奪われたことに対する批判を込めた回答を寄せている。

**外国語** 英語の授業は全員が受けており、授業内容としては書き取り（11名）、暗唱（7名）、会話（4名）、歌（2名）、発音、和訳、詩、文法（各1名）を挙げている。しかし、「嫌いだっただけで印象無し」「国語だけで一杯で英語はさほど興味がなかった」「やる気無し、日本人だから覚えなくとも良いの信念で好まなかった、文法ができなかった」というものから、公立高女からの編入生の「教師の実力も態度も全く駄目、落第点。It is desk を発音が悪く、イット イス テスクと教わった。本当にながかりした」という手厳しい批判まで様々であった。「女学校に入り英語を習うのが面白かったのに、今発音したらかたくておかしく思う」（32年）という時代もあれば、「一年の時は先生が黒板に口の絵を描いて教えた」「カリフォルニア大学出の女の先生でとても楽しかった」（共に44年卒）という時代もあり、教師による影響が大きい科目であることが窺えた。しかし、「戦時下敵国語としておろそかに考えられていたと思う」（40年卒）という記述が、当時の英語の授業に対する日本の姿勢を示しており「一年は初歩3時間、二年からは軍服修理、慰問（兵舎）等」となり、「戦争が激しくなったので途中でなくなり、ほとんど勤労奉仕」（43年卒）に振り替えられていったのであった。そして結局英語は「実用とはほど遠く、役に立たなかった」（44年卒）というのが実状だったといえる。

朝鮮語の学習は、25名がなしとし、1名のみが「春川女学校1年の時は朝鮮語の時間が少しありました」（39年卒）と書いている。朝鮮人卒業生は、「国語使用一点張り、母国語の朝鮮語は小学校（普通学校）の一年間しか習っていません。言語抹殺政策」との怒りを記し、授業に取り入れてほしかったこととして朝鮮語の学習を第一に挙げている。日本人卒業生の中にも、後年になって「外国人として言葉などを覚えれば良かったと思う」（44年卒）と述懐した回答があった。

**理数科** 数学の授業については、興味が持てなかった（11名）、難しかった（9名）、面白かった（2名）、易しかった、ついていけなかった、活気なし（各1名）などの印象が綴られている。興味が持てなかったのは「先生が老齢だったので発音が聞き取りにくくて嫌になった」ということのようにであり、「この先生は声が小さくてよく分からなかった。分かっても分からなくても一人で進んでいた」というのがインタビューでの卒業生の答えであった。ある編入生は「前の学校で数学は進んでいたのを助かった。龍谷は数学がとても遅れていたのを卒業まであまり勉強せず、幾何は兄に教えてもらった」（43年卒）と述べ、別の編入生は「江原道H高女入学、K高女、龍谷と転校してその度に学力の差があり、ついていけなくなりました」（39年卒）と記すなど、転校のもたらす喜悲劇を如実に伝える回答を残している。

理科の授業内容としては、講義（16名）、実験、観察（各10名）、採集（6名）、標本作り（4名）、飼育（1名）が挙げられている。授業に関する記述は少なかったものの、「朝顔の種から実地に育てたこと」（40年卒）「夏休みなど採集、観察の宿題がありました。実験、顕微鏡での観察もありました。大変興味深いものでした」（39年卒）「夜もすがら校庭で流星を数え星座を教えて下さったことは、自然に対する関心を高められ科学者になろうと決心した」（35年卒）など、採集や観察の楽しさが深く記憶されている回答がみられた。

**芸術・体育** 音楽の授業については、歌唱、合唱（各18名）、楽典（10名）、ピアノ（4名）、オルガン、器楽（各3名）、発声、テストに独唱（各1名）が挙げられ、楽典で「コールユーブンゲン」を使ったことが併記されている。龍谷高女は音楽が盛んであり、「2月11日の紀元節には府民館で京城中

の女学校のコンクールがあり一位になった」ことや「特にわが校のプラスバンドは素晴らしかった」ことをほとんどの卒業生が綴っている。事実、『思い出の高等女学校』の中の龍谷高女の項には鼓笛隊（写真1）と1941年の音楽会（写真2）の写真が載せられている。「ドレミではなくドイツ語でツユデエエフィ（忘れましたが）、今の芸大出の先生で怖かったが楽しかった」（45年卒）、「プラスバンドで旗行列の時は先頭に立って市内を行進した。軍隊の慰問に行ったり、外部にも出動した」（45年3年次）といった誇らしげな記述も目立つ。「音楽会は三部合唱（菩提樹）美しい曲でした」（39年卒）と、その情景が浮かんでくるような既述もあった。事実、卒業生有志との会合では、校歌と「如来仏教歌」を美しい声で披露して下さった。同窓会などでもよく歌うということである。

さらに「学芸会の折り先生の指名により舞台上でピアノの演奏をしたことがあり、ひどく感激したことは思い出の一つ」「毎年コンクールに出るために猛練習したことを思い出します。龍谷の講演会に有名なソリストが来られて独唱なさったことを忘れません。女学校でお習いした事が楽しくて未だにコーラスをやっております」「音楽が好きでしたし、先生に褒められるから益々好きになった」など得意な教科についての懐かしい思い出が多数綴られていた。しかし、先生が時々ヒステリーを起こしていたと記した生徒が3名いる。「先生はとても厳しく、忘れ物をすると音楽の本を手を持って上に上げて一時間立たされた。鏡を持っての発声練習、コールユーブンゲンの練習、なれないドイツ語の発音。夢中で覚えた」り、転校生にとっても「音楽の授業は先生がとても怖かった。音符がよく分からなくて困った」ようだ。インタビューでは「ピアノの練習もお金を払えといわれたが、お金が無くてピアノもやめた」という証言も聞いた。さらに、「内鮮一体とはいえ、ある音楽教師の差別は激しく、特に朝鮮系の学生を差別していたように感じられた」という記述もあったことを記しておきたい。

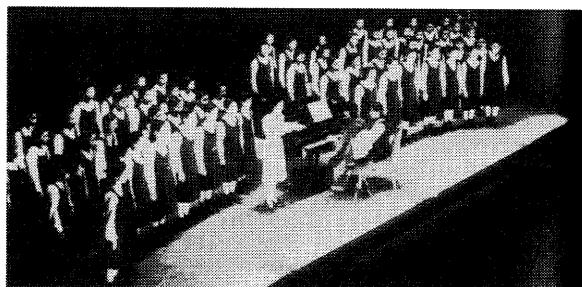
図画の授業は模写（12名）、手本を見て写生（9名）、自由画（8名）、静物画（7名）、風景画（6名）、版画（5名）などの他、「水墨画をやったことが印象的」という生徒が3名いた。反面、「前の学校の先生は洋画で、龍谷では日本画でしたのでとてもとまどった」という感想もあった。生徒の書画は宗祖降誕会等別院の行事の度に展覧されている<sup>23</sup>。

体育では、バレーボール（16名）、スケート（14名）、器械体操（13名）、ダンス（12名）、なぎなた（8名）、陸上（6名）、テニス、水泳、バスケットボール（各2名）、教練訓練（1名）など多様な種目が挙げられている。中でも、龍谷高女はバレーボールとスケートが盛んで強かった。冬は校庭にスケート場

写真1



写真2



出典：『思い出の高等女学校』（ノーベル書房、1987）  
上 p. 70. 下 p. 301.

を作り、体育の時間ばかりでなく放課後もスケートを楽しんだようで、ほぼ全員がスケートの思い出を記している。クラス対抗試合の他、高女対抗試合は漢江で行われ、団体優勝したという回答を5名が寄せている。しかし、「各自がスケート靴を持っていた」との記述があったにもかかわらず、転校生の一人は「冬はスケートの授業ばかりで、私はスケートの靴が手に入らなくていつも見学で寒かった」と書いている。卒業生へのインタビューでは、そのような学生の存在を記憶している人は皆無であった。

また、「バレエ部（9人制）に入部しましたが、あまり上手ではなくやめました」「ダンスなどは楽しかったのですが、走るといつもドンベでした」と、体育が苦手だったことを記す生徒も多かった。その他の種目については「なぎなたの演技を代表して皆に見せた」「京城グラウンドでのマスゲームがつかったけど心が豊かになった」「庭球部、全鮮高等女学校庭球大会に出場」などの記述がみられた。

**家事・裁縫** 家事では、割烹（17名）、染色（12名）、衛生（9名）、栄養（8名）、洗濯（7名）、家計簿（5名）、住居（3名）の回答があった。「日本食、洋食について一通りのマナーを習った」「米、砂糖が不足（配給）で自宅から持参、しかしそのうち無くなった。葛桜の饅頭などもつくった」「地下室の料理室でカボチャのパイを作った」などの印象が綴られている。家政科を担当していた教師も、調理実習の材料が不足して困った体験を記している。また、「包帯の使い方を習った」（42年卒）「市民病院に勉強に行き、准看の免状をいただいた」（45年卒）など、戦時を反映した回答も見られた。

裁縫では、和裁（19名）、洋裁（17名）、手芸（16名）、ミシン（14名）、編み物（13名）が行われた。日本人卒業生の印象は「早縫い」が最も多く、他には「夏、冬休みの時の作品展があり、出品して金賞をいただくのが楽しみでした」「夏羽織まで縫ったように思う」等一般的な思い出が多かったのだが、朝鮮人卒業生は「日本の着物を作る必要はなかった」「朝鮮系でしたので和服は金がかかるし、必要でないからゼネストして朝鮮服を習いました。校長の裁可の下。この後藤校長は仏教徒で人格者でした」と注目すべき内容を記していた。インタビュー調査で事情を確認したところ、「ゼネストというほど深刻なものではなかったが、朝鮮人の生徒が集まって相談して談判に行った。和服はお金がかかり、朝鮮人は貧乏していたので、ああいう高価な衣装は買えない。内鮮一体、内鮮共学という主旨の下で建った学校なので、朝鮮の裁縫も教えて下さいと頼みにいった。それで裁縫先生が特別にして下さった」というのが真相のようだ。この直訴により「朝鮮系学生には特別に講師をおいて朝鮮服を習得させる」ことになった。表6では、ある時期朝鮮人女性教員が1名置かれていたことを示しているが、この女性教員が朝鮮人学生に裁縫を教えていたのである。この朝鮮人学生の行動とそれを受け入れた校長の英断は、特記すべきものといえる。

**公民と教育** 公民と教育の授業があったと答えた生徒は各々4人にとどまっており、他はこれらの教科は無かったと答えるか空欄のままであった。また、あったと答えたものでも具体的な内容について記述したものは少なく、公民では「社会的な様々なこと、裁判所の見学」（40年卒）、「一年だけ日本国民としての務めのようなものを習ったと思う」（42年卒）、教育では単に「作法」（43年卒）とだけ書かれていた。しかし、43年の卒業生に問い合わせたところ、「教育を担当して下さった先生は京城大や他の女学校でも教えていた型破りの面白い先生で、教科書はなかった。当時は子どもを産むということがとても重要なことだったので、1に健康、2に美貌、3に教養と言われた。授業の時、人間はなぜ結婚するのかという質問をされ、私はなぜか種族保存のためと書いてしまい、後で動物的な返事を書いたものだと恥ずかしく思った。他の人はもっときれいに上手なことを書いたかもしれない」という面白い話が伺えた。しかし、公民の思い出はそれ程なく、「選挙のことなどを習った」ということであった。

**授業の印象** 授業は、教科書のみだったという回答が13名、日記や作文を書き先生が添削が5名、副読本・参考書併用が4名であった。副読本としては前述のように、音楽のコールユーブンゲンが挙げられている。授業の印象としては「後半はほとんど授業がなく、雲母剥ぎや軍服のボタン付けだったので、通信簿はどうして付けたのかと友達と話したことがあった」「日記は毎週持って行って先生の気に入らない事ばかり書いた」という記述が印象に残った。

### 3-5. 学校行事

**修学旅行** 修学旅行は、1940年の卒業生までは通常の内地旅行を実施、42年までの卒業生は内地へは行ったものの「物見遊山でなく、皇居清掃という名目」の旅行を行っている。43年以降、修学旅行は廃止となり、忠清南道の古都扶餘へ扶餘神宮の造営勤労奉仕に一週間出かけ、これは20年3月の卒業生まで続いている。しかし、44年3月の卒業生2名は各々「海に2泊した」「1泊で仁川へ水泳、ボート乗りに行った、楽しかった」と記している。この事実確認はできていない。

内地旅行をした生徒は「車中、先生に歌を教えていただき一緒に合唱した事は忘れません」「13泊で、内地旅行として東京、京都、巖島、天の岩戸等々。皆忙しそうでカラン、コロン、早朝から忙しそうな下駄の音に驚かされた。のんきな朝鮮人と違うと思った。東京が一番忙しそうだと感じた」等の感想を記している。1931年6月の『教海一瀾』には、「朝鮮京城龍谷女学校生徒50名は、3名の教師に引率せられ、客月14日午前7時東京着、市内各地の観光、見学を終え、16日退京せり、築地本願寺よりは柘植慈想、坂井本良両氏それぞれ幹旋案内の労を採り一行は無事帰途につきたり<sup>24</sup>」という記事が残されている。「生徒50名」というのが気になるが、龍谷高女の修学旅行には常に西本願寺が関わっていたようである。一生徒は「東京で宿泊が築地本願寺だったので嫌だった」と書いている。しかし、一方で一朝鮮人卒業生は、「内地旅行よりは楽浪文化の平壤とか、新羅文化の慶州などを観光して、朝鮮の先祖の燦々たる文化を研究したほうがよい」と進言していた日本人教師の存在に非常に勇気付けられ励まされたと回答していることを記しておきたい。

扶餘神宮の造営勤労奉仕に出かけた生徒は「旧王宮の跡で加藤清正が攻めてきて米倉が焼けた跡で、その時もまだ焼けた炭ようになった麦、米が出てきたのに驚いた。女官が川へ身を投げた話が悲しかった」「一週間モッコで土運びなどを泊まりがけでしたことはよい思い出になりました。昭和24年に出来上がることになっていましたが今はどうなったことやら」と回顧している。朝鮮神宮に次ぐ官幣大社、扶餘神宮の造営は内鮮一体のシンボルとして、「昭和14年6月15日に百済の扶餘面に御創立あらせられる旨仰出されてより、……300万円の総工費を以て事業を進めつつ」あったものであり、「永く神明の加護を乞い奉るべき半島臣民の赤誠は勤労奉仕に財資の募集に力強く現れている<sup>25</sup>」と記載されるほど、多くの人々の労力や浄財を集めた事業だったのである。

**遠足** 遠足は年2回ほど、仁川や水原、近隣のお寺等へ行ったという回答がほとんどであり、「お弁当とお菓子がとても嬉しかった」「栗拾いなどで担任先生と日本人と共に差別なく面白かった」「元山に初めての遠足で友達とおしゃべりして寝ずに遊んだ」等の印象が記されている。しかし、戦況が厳しくなると「十里行軍<sup>26</sup>」が行われるようになった。京城大学のあった「清涼里」を朝6時に出発して、「春川」まで歩き、帰りは列車で帰るというものである。また、「訓練のため、同じ目方の者を担いで歩いたこと」(44年卒)もあった。生徒のほとんどがこの行軍に参加しており、「大変疲れたが、よい思い出になった」という感想を記している。

**運動会** 運動会については、活躍した競技の思い出を中心に多くの記述があったが、ここではユニークなものを紹介しておこう。「裸足で（ズックは配給）、砂袋（防空用）をバトン代わりのリレー」「少しでも早く走ればとヨードチンキをつけ過ぎて火傷をし、出られなくなり悔しい思いをした」、「ブルマーをはいて下半身を脱いで初めてダンス（スケートワルツ）を踊ったのを親類のおばさんが見て、家に帰ったら大騒動になった。乙女が服を脱いだと祖父に叱られ、明日から学校を辞めろと驚かされた」等である。しかし、中には「運動会や音楽会などの学校行事は記憶に残っていませんが、夏休みの暑い盛りに傷痍軍人の白衣を縫ったり、繕ったりの勤労奉仕の思い出が強く残っています」（39年卒）と答えた生徒もいる。卒業生の心に刻まれた思い出は様々であるといえる。

**講演会** 講演会は、有名なソリストの独唱（40年卒）、従軍記者の戦地の状況報告（43年卒）、人形劇（44年卒）等の他、「本願寺の大谷智子御裏方（本願寺門主の妻）が見えたこと、話しの内容は思い出しませんがお上品な方だなと思いました」（43、44年卒）、「この方はお行儀がよく、列車の中でも姿勢をくずされなかったと聞いた」（44年卒）等の思い出が綴られている。龍谷高女には貴賓室があり裏方もそこを使用されたようだが、4年生になって月1回貴賓室の掃除当番をするのが楽しみだったそうである。特別のソファーがあっていつもは布で覆われていたということである。

また、「ラマ僧が5人位来校した」（43、44年卒）こともある。その時、「雀のキャラメル焼き」を料理してお出することになっていたが、生徒は怖がって逃げてしまい先生が料理したという回想も聞いた。ラマ僧とは共に記念写真も撮った。「ヘレン・ケラーの講演を聞いてショックを受けて眠れなかった」（35年卒）と書いた生徒が1名いた。

**仏教系の女学校としての特別な行事** この項目では、「毎月1日と15日は本願寺のお掃除があった」（39年卒）「時々お寺でお話しやお経を唱えた」（40年卒）、「お彼岸の中日に本願寺に行き、学友らの物故者に対し全員でお参りをしたがお経は覚えていない」（42年卒）、「4月8日のお祭りに徳寿宮へ行った」（44年卒）などの回答がみられた。仏教系の学校として入学式や卒業式などに特別の儀式をすることはなかったようだが、「数珠は必携で皆左手に小さな数珠をかけていた。それを他校の生徒に見られ恥ずかしかった」という。また、初期の頃に在職した教師は「毎晩お坊さんの声が朗々ときこえてきました。寄宿舎では毎日礼拝し、お経を唱えました」と証言している。年度により行事の内容に相違はあるものの、常に西本願寺との関わりがあり、別院の諸行事には学校を挙げて参加している。また大法主の挙式に際して開催された「龍谷学園学生慶賀式」（1937年5月25日、於京都）にも龍谷高女から111名が参加したという記録が残っている<sup>27</sup>。

### 3-6. 家庭学習の時間

学校外での学習時間についての回答は少なく、内訳は2時間（7名）、3時間（2名）であり、「学校が終わってからスケート場まで出向いて暗くなるまで2時間くらい練習」「書道を習っていた」「宿題をするくらいで、たまに父母が面倒を見た師範学生が遊びに来て、分からないところをまとめて教えてくれた」「尊敬する戸石先生の授業は成績が良かったが、もっともっとと思って市の図書館に行ってお先生の教える以上の勉強を毎日2時間ぐらいたした」が具体的な回答であった。「戦争でほとんど余裕なし」というのが実状だったようである。

また、読んだ本や雑誌は、日本文学（夏目漱石、菊池寛、石坂洋次郎、『宮本武蔵』など）、西洋文学（ドフトエフスキー、トルストイ、『風と共に去りぬ』など）、歴史物、少女小説（吉屋信子など）、少

女倶楽部、少女の友、婦人倶楽部、主婦の友、ひまわり、婦人公論、花物語等が挙げられており、「年上の兄や姉がたくさんいたので、本棚に本がたくさんあり、手当たり次第読んだ」と答えた生徒が多く、本はよく読まれていたという印象を持った。朝鮮人卒業生も婦人公論、婦人倶楽部などの日本の雑誌（1名は日本人の級友から借りたと記している）の他、朝鮮語の小説、新聞などを読んだと答えている。また、日本の雑誌の特に洋裁などの付録が楽しみだったと特記した卒業生もいる。インタビューの折、朝鮮人卒業生の1人は、日本の情報を得、日本語能力を維持するために、今でも「文芸春秋」などの月刊誌を毎月購入する他、日本の小説などもよく読むということを話してくれた。その意欲に、こちらが教えられる思いであった。

### 3-7. 高女生のみた教師

戦時下の朝鮮での高女生活の中で生徒の心に残った教師は、「国語の先生、一年生の時の担任で心の広い優しい先生で尊敬していました。だから国語が好きでした」「転校した体育の先生には皆あこがれていました」などの記述に示されるように、自分の得意な分野を認め励ましてくれた先生、素晴らしい授業をなさった先生、共に活動して下さった先生、若くてあこがれの対象だった先生などを中心に、各自がそれぞれ思い出の先生を胸に秘めていることが伝わってくるような記述が多かった。1987年4月22日に韓国済州島で日韓合同同窓会が開かれているが、その時の様子を一日本人卒業生は、「萩先生を慕う韓国の友人達は大勢出席しておられて、萩先生も感極まって涙を流し再会を喜んでおられました。恩師と生徒の目に見えない絆、本当に強いものだと思います」と記している。この萩先生の推挙で、卒業の時、李王家が与える『李王家御慶事賞』という優等賞を貰った朝鮮人学生もいる。反面、「S先生は父母がおられなかった人に親切でなかった」「男の先生 — 軍国主義（時代の流れ）、女の先生 — 男女のことは特に厳しかった」等の記述もみられる。しかし、インタビューなどを通して、卒業後数十年にわたって師弟の交流が続けられていた事例を幾つも伺うことができた。既述したように、授業料の滞納者に対する援助や励ましなど教師の中には朝鮮人生徒の面倒を見ようとする気風が強かったことをこの項でも付け加えておきたい。

男の先生の出征に対する記憶は、10名があると答えている。「好きな先生がお二人出征されて悲しかった。旗を持ってお見送りした」「若い先生は次々と出征なさいました。悲しい思い出です」「テニス部の先生がいなくなるので困ったなと思った。翌年テニス部がなくなり、バレー部に入った」「英語の本格的指導の教師が出征なさり、だんだん英語の時間はなくなりました」「京城駅で出征兵士の歌を歌ってお見送りしました」「男の先生はほとんど出征され、数学の年をとっておられた男の先生と女の先生で学校の毎日を運営。男の先生を戦いへ送る送別の一杯のお酒さえありません。家庭科主任の先生が研究してリンゴ酒を作り、お送りする先生へ差し上げました」（教師）等それぞれの立場での印象が記されている。

女の先生に対する印象は、「現在の京都女子大学出身の素晴らしい先生でその科目が好きになり、進路の相談もし、京都女子大を希望しましたが親が許さず家庭に入りました」「理科担任の戸石先生は知的正義感が強く、人生一生の尊い師と今も崇め慕っています。特に先生は自国の慶州の新羅文化や平壤の楽浪文化を直にみて、自国の誇りと自尊心を保つよう勇気付け励ましてくださった。60有余年文通し、今も多くを教わり励まされて生きています。先生のような人間になりたいばかりに奈良女高師に是非進学したかった」「英語の先生。教え方が上手だったので好きになり、もっと続けていただきたいかっ



た」等であり、人生の師としてまた、進路を考える上で大きな影響を受けていることが窺えた。

女教師の出産については、ほとんどが「記憶にない、考えたこともなかった」と答える中、「当然だと思っていた」が3名、他は「1人でも多くの子どもをという時代でしたから、立派な方だと思っていました」「大きなお腹をして体操を教えていた先生を大変だと思った」「お腹の大きな先生が1人居ました。別に生まれたことを聞いたわけでもなく関心はありません。ウブでした」という回答があった。若くて、出産を控えた女教師の心情までは思いやれなかった、というのが現実のようである。

### 3-8. 女学校時代の印象

友人関係については、ほぼ全員が親友がいたと答えており、「よく放課後遅くまで残って家の中のことなどの悩みを話した」「引き揚げて50数年になりますが、いまだに旧交を暖めております」「3人の仲の良い人がいて、この年になっても姉妹のようです」と長年の友情を綴っている。「親しくしていた友人2人までが結核になり、卒業と同時に死亡」という回答もあった。しかし、日本人卒業生の内、朝鮮人の友人がいたという回答は5名のみで、それも「日本人と全然変わらない方で言葉もきれいでハンゲルを知らずに育った方でした。人柄もよく皆が好きでした」「お母さまが日本人だったお友達は小学校から一緒に仲良くしていました」など、対象は日本人と親しくなるような要素を持っている人にとどまっていたことが分かる。多くは「クラスの中ではお喋りしたが……」というつき合いであったようだ。他方、朝鮮人卒業生は「日本人の友人もいたが、ヨボと呼んで軽蔑した」「ヨボさんはニンニク臭いよと罵られた。お弁当がニンニク臭いからみんないやがって。だからできるだけ臭いのしない韓国式のお弁当を持っていった」「日本の友人は親切でやさしいけれども本音はなかなか打ち明けませんでした」と、当時の状況を思わせるような内容を記している。

### 3-9. 影響を与えた事件・人物、世界の動向

女学校時代、考え方や生き方に影響を与えた事件・人物については回答が少なく、戦争（3名）、先生（2名）、父、進学が思うように行かなかったこと（各1名）のみであった。その内の1人は「一年生の末に父と母を亡くし大変でした。兄達に頼ったと思います。また、薬学の専門学校へ行くのを学校にひどく勧められたが思いとどまったこと」が、その後も大きく影響したと答えている。また「終戦です。自分のなりたいことはこの時から始まりましたが、当てが外れて日本へ戻りました」など、個人の方では防ぎようもない事柄によって、人生が大きく左右された状況が綴られていた。朝鮮人卒業生で「本願寺系統の学園でいつも世情無常を感じました」と書いた生徒がいるが、朝鮮人ゆえに何か強く感じるものがあつたのだろうか。真意を測れないだけに気になる回答であった。

世の中の動きに対してどのような注意を払っていたのか、どんなことを感じていたのかという質問については、多くの回答が寄せられた。「ひたすら忠実でした」「幼くて注意を払うという程のことはありませんでしたが、次第に暗い時代に入っていくことを何となく感じ、心を痛めておりました」「戦争が多い青春時代で、また外国人に見下されている（黄色人種）のがいやな時代でした。また、憲兵が怖かった時代」「朝鮮で生まれ育ち、日韓併合、言葉は知っていても真実を知らず、唯々大和撫子でした。引き揚げてみて驚いた次第」「戦争が激しくなってモンペをよくはいた。日本は強いと思っていた」「だんだん物資が無くなってよく配給に並ばされ大変な時代とと思いました」「4年生の頃には勤労奉仕が多く、内地の情報を聞いたりしていつも心が落ち着かない気分でした」など、十分な情報・認識は

持っていなかったものの、だんだん暗くなる世の中に心を痛み、不安を感じていた様子を伝える回答が多かった。また、「終戦と同時に朝鮮人が暴れ出したこと」など激しい状況の変化に戸惑いを感じた生徒も多い。戦争の直中にいた高女生は「戦争が勝利に終わってから自分達の人生も新しく始まるような気持ち」を抱きながら毎日を過ごしていたようである。

#### 4. 卒業後の生活と女学校に対する評価

##### 4-1. 女学校生活への評価

龍谷高女は昭和と共に始まり、敗戦と共に終わった学校であったのだが、そのような時代の女学校生活全般にどのような印象を持ち、高女の教育をどう評価しているのだろうか。

多くの卒業生は、暗い時代にも関わらず友人もたくさんいて、楽しい時代だったと答えている。「卒業前に学芸会のようなことがあり、皆それぞれ芸を競ったことがあった。とても楽しく記念写真等を撮った」ことを回想した記述もあった。同窓生の会合でも皆異口同音に「芸達者が多かった」と答えている。

反面、「学校から4キロの範囲は歩かなくてはならないという規則があり、途中で電車を降りた。冬は道が滑って歩くのが大変だった。朝鮮馬という小型の馬が馬車を引いていたのだが、何度も馬が転んだのを見た」「南大門近くの朝鮮神宮が見えると、車内の全員（運転手も車掌も）が立って神宮の方を向き、先勝祈願のため敬礼しなければならなかった。当時女学生や中学生は車内で座ってはいけないという決まりだったが、体の弱い人は許可を得、金色のボタンのような印を貰って、それを付けていると座れた」「毎月8日は当番が早出して朝鮮神宮で武運長久を祈った」「よく慰問文を書いたが、先生が出す手紙も来た手紙も全部検閲した」など多くの規則に縛られてもいた。「昭和16年12月8日（大東亜戦争勃発の日）通学電車事故で朝礼に遅れ、全校生徒の中、一回り走らされたこと」を印象にあげた生徒もいる。このような時代を反映して「ただ遊んだことと戦地の兵隊さんへの慰問袋の作成とか、軍隊でマスクの受け方とかを習った。戦時体制でした」「軍隊の衣服の修理と学徒動員」などの回答が多かったが、「それがあたりまえ」と感じていたようである。

他方、高女の教育はどのように評価されているのだろうか。

「礼儀作法と言葉遣いを厳しくいわれたのが良かった、愛国心は強くなった、古代の歴史とか漢文をもう少しやってほしかった、皇室に関することは避けた時代」「一般常識を教えていただき感謝」「今の学校と違って手芸、裁縫、作法をよく教えて下さいました」「両親が高女を出して下さったおかげで自分の好きな道を選ぶための受験資格があり、有り難く思っている」「視野が広がったと思う。大らかさがある」「外人と接することにこだわりがない」など、プラスの評価をし感謝の気持ちを抱いている人が多い。反面、「勉強不足」「現地の友人ともっと仲良くしておけば良かった」「外国人として言葉などを覚えれば良かった」「外地の人の生活を知ったことは良かったが、外地の人に対する思いやりが足りなかった」など反省の言葉も並んでいる。

朝鮮人卒業生の回答には「内鮮共学としての女学校でしたが、朝鮮人の数は少なく、私のクラスはT高女でゼネストをして退学になり編入してきた方が2、3名いて意識的な反日・反帝の思想の持ち主がいた。しかし、私立学校とあって思想は自由な教師がいて幸いだった」ことも記されている。また「当時の教育は良妻賢母、皇国臣民たるのみ、全く非科学的だった。内鮮共学で日本人から蔑視されて民族意識が早めに目覚めたと思う。日本人に負けまいと一生懸命勉強し、早く日本帝国主義の軍閥圧制から

抜け出て、朝鮮の独立を勝ち取ろうと思う意識が芽生えたと思う。自国の言葉、自国の文化を守りたいと思うようになった」という強い意識を持って勉学に励んでいた人もいたのである。日本人卒業生の中にも「戦争に向かったのその教育が非常に悪かった」と述懐する生徒もいたが、当時は、朝鮮人の学生の置かれた状況を考え思いやることもなく過ごしていたのであった。同じ年齢でありながら、抑圧者の側にいた者には測り知れない気持ちを抱えつつ過ごしていた朝鮮人卒業生の記述が印象に残る。

#### 4-2. 卒業後の生活

卒業後の進路は、就職（10名）、進学（8名）、花嫁修業（2名）その他である。就職先としては、軍司令部（4名）、鉄道局（2名）、総督府、朝鮮銀行、住友軽金属（各1名）などであり職種はタイピスト（4名）、事務である。「勤め先で開墾したり軍事教練、モールス信号、手旗信号など教えられた」「45年9月7日に軍から解雇命令が出された。進駐軍が入って来るというので机の中などを整理し、遺書も書き、爪と髪を切って同封した。進駐軍が来たら男の人が殺してくれることになっていたが当時は死ぬということが少しも恐くはなかった。あの遺書はどうなったのだろうか」など、時代を感じさせる回想も寄せられている。

進学した卒業生の進学先は、京都府立女専（→小学校教師）、女子師範（→小学校教師）、和洋女子専門学校、京都女子高等専門学校（→韓国国際大学日本語科教授）、京城女子医専（→医師）などであり、それぞれの努力の跡が窺える内容が記されていた。鉄道局に1年半勤務した後、教員試験を受けて小学校教員をしていて敗戦、引き揚げ後結婚、離婚、幼稚園教諭（園長）を体験した卒業生は、「引き揚げまでは何も知らずに無知だったが、持ち前の明るい性格と、スポーツで鍛えた健康体と不屈の精神が大きく自分を支えてくれた」と記している。

引き揚げの時期については、1945年以前（2名）、同年8月（2名）、同年9月（3名）、同年10月（5名）、同年11月（5名）、同年12月（1名）、1946年10月（1名）、1947年2月（1名）、教師（45年11月、46年5月）であった。「食生活にすごく難儀。3カ月目の女兒に母乳がたっぷりあったことには感謝。引き揚げ中の幼児の死が多く悲しい思い出です。京城を出発して1カ月近くも釜山小学校で生活中的事でした。おにぎり一人一個ずつの配給があり、栄養失調で何人かの死人も出、人生悲しうございました」「家族が多く、引き揚げの時、勤務先の方と汽車で一緒になり部隊長というあだ名を貰いました。母は身重で私が長女であり、弟妹達を引き連れていましたので。父は2、3カ月後に引き揚げてきました。あの時の苦しい思い出二度としたくないです」など、それまでの生活が一転し、辛酸をなめた状況が綴られている。そして、帰国してからも、「親戚の物置を借りて生活しました。朝鮮の時と違って引揚者という目で見られ配給だけの辛い生活をしました。だから毎日朝鮮にいたときの思い出ばかりを母と話し合いました」「食糧難のため持ってきた衣類などをヤミ市に持っていき、お米や日用品に変えてもらう暮らし」が続いたのであった。

結婚については、既婚者23名、未婚者1名、無記入2名である。「親任せ、深く考えずに漠然と、貰ってくれる人がいたから、理想の結婚はできなかった」など多少の後悔を含んだ回答が多かった中、「長女で弟妹が多かったので、早く一軒をかまえて皆に遊びに来てもらおうと思った」「早く結婚して良い子どもを育て上げなければいけないと思っていた」という記述も見られた。

既述したように高女生の兄弟数は4.8人であったが、結婚して出産した子どもの数は、2.26人であり、内地高女卒業生、さらに前回調査の外高女卒業生の平均2.4人よりも少なかった。

夫の職業は、会社員（10名）、公務員（4名、教員1名を含む）、自営業（4名、米屋、出版関係、カメラ店）、代議士秘書（1名）である。他の外地の高女生の夫の職業では官吏・公務員が多いのに比べ、会社員（具体的勤務先等は不明）が多いことが特徴といえる。

## 5. まとめにかえて

龍谷高女は昭和と共に始まり、敗戦と共に終わったわずかに20年の歴史を持つ高女である。しかし、朝鮮の私立高女の中では日本人によって創立された唯一の仏教系私立高女であり、西本願寺との関わりとそこから派生してくる種々の特徴が窺える高女である。「仏教の学校でしたので仏の心、感謝する心、人を思いやる心など学んだ」「仏教の学校だったので根本的に人を大切にする敬う心を授かったように思う。人を愛する気持ちを持ったし、先生方は真面目だった。スピードスケートの合宿や練習で苦しかったけれど、現在あるのはその頃のたくましさが残っていると思う」などの記述に仏教系女学校としての影響が感じられる。

また、今回のアンケートでは、朝鮮人卒業生が高女在学中から民族的な意識を持っていたことが随所にみられたことも特徴であった。既述のように日本人卒業生の多くは、ようやく現時点において、朝鮮人に対する思いやりの欠如や無知を感じており、もっと朝鮮半島を歩き、言葉を覚え、友人と仲良くしておけば良かった等の心情を記している。夫婦とも引き揚げの卒業生は「夫は、今、テレビなどで当時の様子を見ると、悪いことをしたなとつぶやいている」と語ってくれた。一方で「金大中大統領訪日を、大変意義深く関心を持ってみる事ができる」と、現在は外国となってしまった地域に住んだ事実が今なお深く作用している複雑な心中も窺えた。

敗戦、引き揚げという体験は「少しのことであればびくともしない強さ」をつちかい、「のんびりと大陸的で、しかしどこか積極的な」生き方をもたらししてくれたと語っている。青春時代に吸収したものは高女生の生涯の財産となり、その後の人生を豊かにし、同級生とより深いところで共感できる貴重な思い出となっていることが強く窺えた。龍谷高女生の特色は、自由記述の方により明瞭に現れているが、紙面の都合で割愛せざるを得ないものが多かった。今後も今回与えられた卒業生との出会いを大切に、インタビュー調査等を継続し、この学校実態の把握と同時に植民地における女子教育という分野の歴史的検討に努めていきたいと考えている。

（岐阜大学留学生センター助教授）

## 注

1. アンケート調査の報告および関連の研究結果は、山本禮子・福田須美子「高等女学校の研究—1920年代の教育実態をめぐって—」（和洋女子大学紀要第26集文系編、1986）、山本禮子「高等女学校の研究（第二報）—高等女学校のアンケート調査から—」（同27集、1987）、「高等女学校の研究（第三報）—高等女学校長会議を中心に—」（同28集、1988）、「高等女学校の研究（第四報）—高等女学校のアンケート調査から(2)」（同29集、1989）、「高等女学校の研究（第五報）—熊本県立第一高女におけるダルトンプラン」（同30集、1990）、「高等女学校の研究（第六報）—外地高女卒業生のアンケート調査から—」（同31集、1991）、「施設・設備からみた高等女学校教育の側面」（同32集、1992）、「高等女学校の研究—植民地時代の台湾の教育」（同33集、1993）、「台湾の高等女学校研究—インタビューにみる女学生生活とその背景（その1）」（同38集、1998）、「台湾の高等女学校—インタビューにみる女学生生活とその背景（その2）」（同39集、1999）、新井淑子・館かおる「南洋群島における高等女学校—アンケート調査を中心に—」（お茶の水女子大学女性文化研究センター年報第5号、1991）、山本禮子『植民地台湾の高等女学校研

- 究』（多賀出版、1999）、高等女学校研究会『高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料 No.1～6』、新井淑子「植民地台湾における高等女学校出身の女教師の実態と意義—アンケートとインタビュー調査資料」（科研成果報告書、1998）などとして発表されている
2. 尹健次『きみたちと朝鮮』（岩波ジュニア新書、1991）、p. 118.
  3. 宋枝学訳編『朝鮮教育史』（くろしお出版、1960）、p. 120.
  4. 参考までに、京城にあった男子の中等教育機関は、京城公立高等中学校、龍山中学、旭が丘中学（敗戦の1年前に設立）、京畿道立商業学校、京城公立商業学校、善隣商業学校、京城公立工業学校の7校である。
  5. 金富子『植民地期朝鮮における女子教育—1930年代の初等教育を中心に』（東京学芸大学修士論文）、p. 5およびp. 7.
  6. 書堂は、基本的には民衆の創意によって自主的に運営される初等教育機関として全国にあまねく存在し、国民の教育に重要な位置を占めてきた。その設立形態により以下の4類型に分けられる。（尹健次『朝鮮近代教育の思想と運動』（東京大学出版会、1982）、pp. 247-248参照。
    - (1) 訓長自営の書堂：唯一の書堂教師である訓長が自己の生計、あるいは教育趣味のために設立した書堂。
    - (2) 有志経営の書堂：裕福な有志が単独で経費を負担し、自家の師弟および近隣の子弟を無料で教えた書堂。
    - (3) 有志組合の書堂：有志が組合を組織し、訓長を招聘して組合の子弟を教えた書堂。
    - (4) 村落組合の書堂：一つの村落が組合を作り、訓長を置いて村落の子弟を教えた書堂。
  7. 同上、p. 47. 書堂への女子の就学者数は1920年代には5000人前後で横ばい・漸増を続けているが、1933年には1万人に達し、1938年に3万401人、1942年に4万7751人である。
  8. 大谷派本願寺朝鮮開教監督部編『朝鮮開教五十年誌』（1937年10月）、p. 48. なお、山口太兵衛（商業銀行頭取）は、善隣商業学校の設立にも関与し、いとこの田代忠次郎を鹿兒島から呼び寄せ校長にしている。（龍谷高女1940年卒業生で孫の佐々木幸子からの聞き取り）。
  9. 同上、p. 48.
  10. 『教海一瀾』、No. 713（大正14年12月23日）、p. 18.
  11. 『教海一瀾』、No. 717（大正15年4月30日）、p. 28.
  12. 山本一哉『写真集 思い出の高等女学校』（ノーベル書房、1987）、p. 349. なお、同書では、龍谷高等女学校の創立を大正15年1月としている（p. 366）が、これは明らかに間違いである。
  13. 美籐遼「日本仏教の朝鮮布教」（『三千里』15号所収）、pp. 118-119.
  14. 本願寺派は「官公私立60余校の高女があってもその出身者がその上に行くことが出来ず、各方面の希望は非常なものである」ことを受け女子専門学校の設立も検討し（『中外日報』、1931年1月15日号）その手始めとして「藤花女塾」を1942年9月1日に開塾している（『中外日報』、1942年9月19日号）。しかし、結局女子専門学校の設立は実現せず、「藤花女塾」も大きな発展をみることはなかった。
  15. 『中外日報』、1927年4月10日
  16. 尹前掲書、p. 131.
  17. 『中外日報』、1927年7月2日
  18. 『教海一瀾』、No. 808（昭和8年8月20日）、pp. 16-17.
  19. 『教海一瀾』、No. 809（昭和9年5月15日）、pp. 17-18. なお『教海一瀾』、No. 830（昭和11年3月5日）、p. 3には、「本派朝鮮京城の別院では経営する龍谷高女の教室の新築が完成について大講堂、音楽、作法、割烹室、来賓室の建築に進捗し偉容を整えつつある」の記事が見られる。
  20. 『教海一瀾』、No. 819（昭和10年3月）、p. 20.
  21. 同上。
  22. この調査は、山本禮子「高等女学校の研究（第六報）—外地高女卒業生のアンケート調査から—」（和洋女子大学紀要第31集、91年）を指す。
  23. 『教海一瀾』、No. 741（昭和3年6月7日）、p. 10に京城の降誕会の見出しで「(前略) 展覧会は龍谷女学生、桂山普成学生、日曜学校の書画成績品を展覧し(攻略)」という記事がみられる。
  24. 『教海一瀾』、No. 774（昭和6年6月19日）、p. 12.
  25. 『中外日報』、1942年9月29日

26. 回答の中には、「七里行軍」だったという記述もある。小学校3年頃から行き先や距離を学年毎に考慮して行軍が行われていたようであり、記憶が混同しているものと思われる。
27. 『教海一瀾』、No. 741 (昭和3年6月7日)、p. 10.

付録1 アンケート様式《高等女学校に関するアンケート——日本人卒業生用——》

( \* 今調査の追加項目 )

質問1 あなたの生年月日、出生地をお書きください。

明治 都  
大正 年 月 (出生地) 道 市  
昭和 府 郡  
県

質問2 あなたが高等女学校に在学なさったのはいつですか。

〈入学〉 〈卒業〉

明治  
大正 年 月 日 年 月 日  
昭和  
〈高等女学校名〉 立 高等女学校  
旧国名をお書き下さい。 ( ) 国

\* 高等女学校入学前の小学校名とその地名をお書き下さい。

( ) 小学校 地名 ( )

\* 高等女学校の試験科目はどのようなものでしたか。

( )

\* 小学校時代どのような試験勉強をしましたか。学校での指導はどのようなものでしたか。

( )

\* 小学校時代のクラスは何人ぐらいでそのうち何人が高等女学校へ進学しましたか。

( )

質問3 あなたの高等女学校の生徒数は全体、またクラスに何人位いましたか。

全体 ( ) 人位、そのうち 現地人は ( ) 人位

クラス ( ) 人位、そのうち 現地人は ( ) 人位

質問4 高等女学校入学時の家族構成についておたずねします。同居していた方に○をつけてください。兄弟姉妹については別居の方も人数を記入してください。

祖父、祖母、父、母、兄 ( ) 人、弟 ( ) 人 姉 ( ) 妹 ( ) 人、叔父、伯母、  
使用人 ( ) 人、うち現地人 ( ) 人

質問5 高等女学校入学時、あなたのご両親のお仕事は何でしたか？

父の仕事 ( )

母の仕事 ( )

そのほか ( )

質問6 高等女学校に入学なさったのは、どのような理由・動機からですか。あなたのお気持ちやご両親のお考えをお聞かせ下さい。入学動機として該当するものに○をつけてください。

a. 自分の意志で入学した。

イ 進学するのが当然だと思った

ロ 周囲が反対だったが、自分で希望した

b. 親にすすめられたから

- c. 教師にすすめられたから
- d. 兄弟姉妹にすすめられたから
- e. その他 具体的にご記入ください。

( )

**質問7 在学中の授業についておたずねします。**

- (1) 次の各教科目につき、記憶に残っていることをなるべく具体的にお書き下さい。

○はいくつつけても結構です。

- a. 修身の授業はどなたが担当なさいましたか。また、どのような教えが印象に残っていますか。(具体的に)  
校長、修身の先生、他の教科の先生、その他 ( )

印象に残っていること ( )

- b. 国語の授業で重点がおかれたことに ○をつけてください。(具体的に)

古文、漢文、書き取り、作文、読書、その他 ( )

印象に残っていること ( )

- c. 歴史・地理の授業で重点がおかれていたことに○をつけてください。

暗記、地図作成、見学、史跡調査、その他 ( )

印象に残っていること ( )

- d. 英語の授業はありましたか。

有 1. 希望者のみ 無

2. 全員がうけていた

3. その他

英語の授業を受けましたか。受けた方は、どのようなことを行いましたか。

受けた 受けない

暗唱、歌、劇、会話、書き取り、その他 ( )

印象に残っていること ( )

- e. 現地語を学習しましたか ( )

- f. 数学の授業の印象はいかがでしたか。

難しかった、易しかった、面白かった、興味がもてなかった、その他 ( )

印象に残っていること ( )

- g. 理科の授業でやった事柄に○をつけてください。

講義、実験、観察、採集、標本づくり、飼育、その他 ( )

印象に残っていること ( )

- h. 音楽の授業でやったことに○をつけてください。

歌唱、合唱、器楽(ピアノ・バイオリン・オルガンなど)楽典、現地の楽器、その他 ( )

印象に残っていること ( )

- i. 図画の授業では、どのようなことをやりましたか。

手本を見て模写、自由画、写生(静物画、人物画、風景画など)、彫刻、粘土、版画、

その他 ( )

印象に残っていること ( )

- j. 体操の授業では、どのようなことをやりましたか。

ダンス、なぎなた、器械体操(肋木・平均台・とび箱)、球技(テニス・バレーボール・卓球・バスケットボールなど)陸上競技、水泳、その他 ( )

印象に残っていること ( )

- k. 家事の授業ではどのようなことをやりましたか。

衛生看護、家計簿、洗濯、染色、割烹、栄養、住居、その他 ( )

印象に残っていること ( )

1. 裁縫の授業ではどのようなことをやりましたか。  
和裁, 洋裁, ミシン縫い, 手芸, 編み物, その他 ( )  
印象に残っていること (早縫い・礼服縫いなど) ( )
- m. 教育の授業はありましたか。また、内容はどんなものでしたか。  
有 ( ) 無
- n. 公民の授業はありましたか。また、内容はどんなものでしたか。  
有 ( ) 無
- (2) 授業の方法はどのようなものでしたか。  
a. 教科書のみ  
b. 副読本・参考書併用  
(具体的にわかっていたら本名を書いて下さい: )  
c. 特色ある授業方法だった  
(例えば、自学自習, ダルトン・プランなど、日記や作文を書き先生が添削したなど)
- (3) 授業に関して印象に残っていることを自由にお書き下さい。

**質問8 学校行事についておたずねします。**

- (1) 修学旅行は何泊位でどこへいきましたか。また、印象に残っていることをお書き下さい。
- (2) 遠足はありましたか。年何回位ですか。どのような記憶がありますか。  
有 (年 回位) 無  
( )
- (3) 運動会については、どのような思い出がありますか。  
( )
- (4) 音楽会やバザーについては、どのような思い出がありますか。  
( )
- (5) 講演会の講師として、どのような方がいらっしゃいましたか。話の内容と思い出に残る事柄をお書き下さい。  
( )
- \* (6) 仏教系の学校として何か特別の行事はありましたか。また、特別の思い出がありますか。  
( )

**質問9 課外活動（授業以外の活動）についておたずねします。**

- (1) 校友会活動（例えば文芸部、演劇部、庭球部）などはさかんでしたか。あなたはどのような活動をなさいましたか。  
( )
- (2) 生徒会活動は行われましたか。あなたは参加しましたか。  
( )
- (3) 学校以外で学習する時間はどの位でしたか。  
( )
- (4) 在学中に、教科書以外にどのような本や雑誌を読みましたか。  
( )
- (5) 世の中の動きをどのように感じていましたか。  
( )

**質問10 先生方についておたずねします。**

- (1) 印象に残っている先生（好き嫌い、影響をうけた）などには、どのような先生がいらっしゃいますか。  
a 校長 ( )  
b 男の先生 ( )  
c 女の先生 ( )
- (2) 先生に、進路や生き方、悩みごとなどを相談しましたか。



( )

- (3) 男の先生の出征についての思い出がありますか。

( )

- (4) 女の先生の出産・子育てについて、どのように思っていましたか。

( )

**質問11 友人についておたずねします。**

- (1) 親しい友人はいましたか。どのようなことが印象に残っていますか。

( )

- (2) 現地人の友人はいましたか。( )

- (3) 在学当時上級生・卒業生とのつながりがありましたか。どのようなことが印象に残っていますか。

( )

- \* (4) 卒業後、同窓生との交流はありますか。

( )

- (5) 生き方や進路、悩みごとなどを友人に相談しましたか。

( )

**質問12 高女在学中に、あなたの生き方・考え方に影響を与えた人物、事件等は何ですか。**

( )

**質問13 実現しなかったが在学中に本当はしたかったこと、卒業後なりたかった職業がありましたらお書きください。**

( )

**質問14 その他、女学校生活全般で印象に残っていることをお書き下さい。**

( )

**質問15 卒業後の進路はどのような形をとりましたか。あてはまるものに○をつけ、具体的にご記入ください。**

- (1) さらに上級の学校に進学した(具体的な校名: )

- (2) 就職した(具体的な職業名: )

- (3) 家庭で花嫁修行をした

- (4) 職業ではないが、社会的な活動を行った

- (5) その他( )

**質問16 現在に至るまでの活動についておたずねします。あてはまるものに○をつけ、具体的にご記入ください。**

- (1) 一度就職したが辞めた(辞めた理由: )

- (2) 一度も就職しなかった(理由: )

- (3) 再就職した どのような経緯で:

仕事の内容:

時間:

- (4) 就職して現在も継続中(具体的に: )

- (5) 就職はしなかったが、社会的な活動を行った

(具体的に: )

**質問17 戦争中は、どのような生活をしていらっしゃいましたか。**

**質問18 帰国年月日を教えて下さい。**

年 月

**質問19 戦争後は、どのような生活をしていらっしゃいましたか。**

**質問20 結婚についておたずねします。**

- (1) あなたは結婚しましたか。

結婚した 結婚しなかった

- (2) 結婚についてどのような考えを持っていたかお書きください。

( )

(3) 結婚なさった方は、夫の職業、子供の人数をお書きください。

夫の職業 ( )

子供の人数 ( ) 人

質問21 外地で高等女学校の教育が、あなたの人生にどのような影響をあたえたと思いますか。具体的にお書きください。

よかったこと ( )

悪かったこと ( )

質問22 現在ふりかえて、外地での生活が役に立ったこと、足りなかったこと等をお書きください。

役に立ったこと ( )

足りなかったこと ( )

\*質問23 在学時代の学校の状況が分かる物、文集、ノート、日記類や写真、文書等何でも結構ですから、資料をお持ちの方はお教えください。

( )

質問24 その他女学校に関すること、当時のことを何でも自由にお書き下さい。

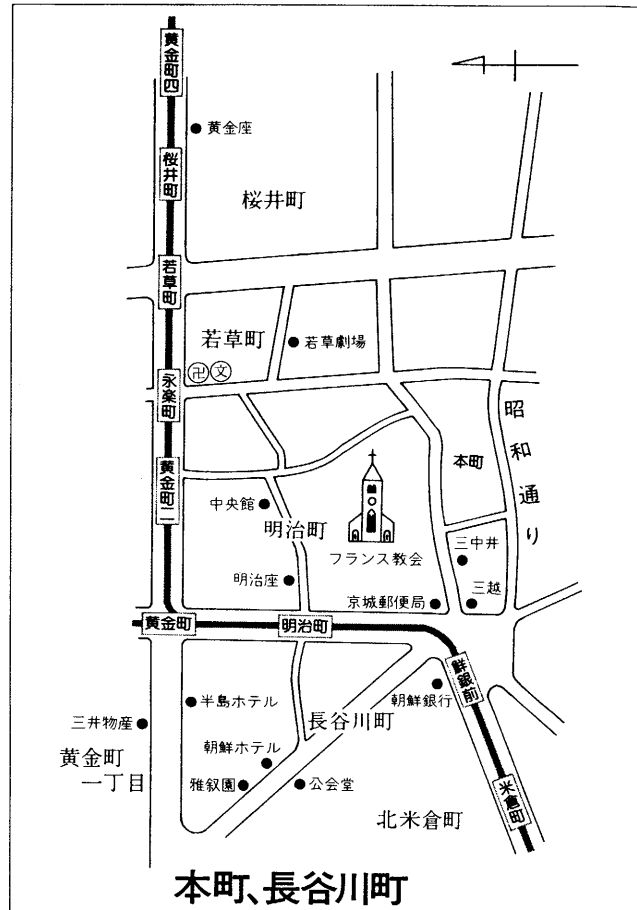
ご協力ありがとうございました。今後、問い合わせさせていただきたい場合もございますので、よろしかったらあなたの住所、お名前をお教え下さい。

住所

氏名

TEL

付録2 京城地図



出典：沢井理恵『母の「京城」私のソウル』（草風館、1996）  
 \* ⊕本願寺派朝鮮別院 ⊗龍谷高等女学校（1928年1月～1933年7月）印は著者の付加